

「留学生30万人計画」について



海外交流

辻 毅 一 郎*

Toward "300,000 Foreign Students Plan"

Key Words : International College, FrontierLab@OsakaU,
Summer Program, Support Office

はじめに

2008年初頭の福田前首相の所信演説で「留学生30万人計画」が打ち出され、その後、中央教育審議会、教育再生懇談会などで、その実現を目指した施策が種々提案されました。例えば、国内の大学の30校を指定して2025年までにそれらの留学生比率を20%以上にするなどです。「地域に生き世界に伸びる」をモットーとし、「教養・デザイン力・国際性」を備えた豊かな人材育成を標榜している大阪大学は、もとより国際化を加速的に進め、真に「世界に開かれた魅力ある大学」となるため、国際交流の組織的促進に努めてきました。しかし、留学生比率を20%以上にするということは、大阪大学の場合、留学生の数を数千人に増やす(2008年5月現在1385人:5.7%)ということ、容易に達成できる数ではありません。とはいえ、「留学生30万人計画」に際し、今後留学生比率の向上に今まで以上に積極的に取り組みたいと考えています。未だ予算措置がなされていないので、夢を語るだけとなりますが、本部国際交流室の構想の一端をご紹介します。

より多くの留学生を大阪大学へ

自国以外で教育を受けたいと考えている外国の学生が、実際、大阪大学に入学し、無事修了するまでの関連事象を時間を追って整理すると図1のように

なります。同図左側に示されるように、世界から留学生が大阪大学に来て教育を受け、付加価値を獲得して、終了後は世界のどこかで就職することになります。この図から、より多くの留学生に大阪大学に来てもらうためには、魅力のある教育プログラム・研究機会を提供することはもちろん、時間経過に従って必要となるサービス、例えば到着時のオリエンテーションさらにはキャリア形成支援などを提供し、大阪大学での生活を快適に過ごせるような環境整備を行うことが重要であることが分かります。

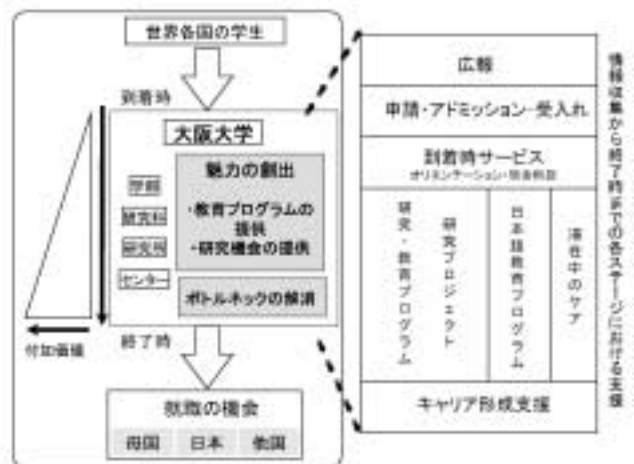


図1 外国人研究者・留学生のための環境整備



*Kiichiro TSUJI
1943年9月生
ケース・ウェスタン・リザーブ大学大学院 (1973年)
現在、大阪大学 理事・副学長 (国際交流担当) Ph.D. 電力・エネルギーシステム工学
TEL : 06-6879-4063
FAX : 06-6879-4068
E-mail : tsuji@pwr.eng.osaka-u.ac.jp

インターナショナル・カレッジ構想

日本で学ぶ場合の大きな障壁は日本語です。欧米の学生はもとよりアジア諸国の学生にとって、日本語の習得を前提とするのは、かなりの負担です。日本に来るのだから日本語運用能力を付けた上で来日すべきであるという考え方もありますが、とくに理系研究科での勉学をめざす学生にとっては、授業は英語で行われるほうが有り難いという感覚があるでしょう。以前私がベトナムを訪れたとき、留学

をめざす国はアメリカ、欧州、韓国、日本の順番であるという話を聞きました。韓国は授業の英語化がかなり進んでいる国で、日本の人気が高いのは、この障壁のためではないかと言うのです。

そうしたことから、すでに工学研究科・基礎工学研究科では、日本語を前提とせず博士の学位取得が可能な大学院教育プログラムが提供されています。生物工学英語コース、基礎工学英語コース、船舶海洋工学英語コースおよび量子工学英語コースです。いまのところ、受入れ人数は全部で毎年およそ20～30名です。本部国際交流室の夢は、各部局・専攻で提供しているこれらのいわゆる英語コースをとりまとめ、インターナショナル・カレッジとして編成し、その定員規模も毎年100名というように増やしたいということです。インターナショナル・カレッジとすることで、図1で示した広報、アドミッション、到着サービス、キャリア支援などのサービスを、各コースに共通なサービスとして提供できるでしょう。また、提供するコースの改変・追加・削除も比較的簡単に、学生のニーズに合わせて行うことができると考えられます。すなわち、英語コースを新たに提供しようと考えているが、学生の募集に始まる後方支援の部分を負担に感じる教員も、このような仕組みが整っていれば、コースの提供に積極的になると予想できます。インターナショナル・カレッジは外国人にとって魅力のある教育プログラムを提供できる場になりますし、また、このカレッジを日本人にも開放することにより、日本人学生の国際化にも貢献することになります。

短期留学生受入れプログラム

学位取得を目指したプログラムは、いわば長期滞在型ということですが、世界的な傾向としては、学生の流動性を高める、すなわち在学中の留学経験つまり異文化体験を奨励する活動が盛んになっています。この場合には、学位取得を前提としない1年未満というような短期留学が主体となり、本学もこのような短期留学生の受入れを、今後拡大して行きたいと考えています。以前、留学生10万人計画の一環として、英語のみで授業が行われる短期プログラムの提供が奨励された時期がありました。大阪大学も、この趣旨に沿って、OUSSEP(Osaka University Short term Student Exchange Program)が創られ、

すでに10年以上運営を続けています。一方、英語での授業ということに拘らないプログラムとして、旧大阪外国語大学が開発したOUSSEP-Mapleという、主として日本語・日本文化を学ぶプログラムも提供しています。

さらに、2008年10月からはFrontierLab@OsakaUという全く新しい短期留学受入れプログラムが創られました。このプログラムは理系の、いわゆる研究室で、主として研究に従事して成果を挙げることを期待するという主旨のもので、ご承知の通り、理系の研究室では先端的で世界的な研究が行われています。そして、学士号の取得には、卒業研究を行い、卒業論文をまとめることが必要条件となっているのが普通です。学生は研究室にあって切磋琢磨し、「研究」体験をとおして自己能力の向上を行っているといえます。外国の大学では、学部レベルでは、「学生実験」が課されるのは普通ですが、「研究」体験が要求されているところはむしろ少なく、このような卒業研究の仕組みは日本の大学教育の特徴といえるでしょう。このような教育はしばしば"Learning in the Community of Practice"と呼ばれているようで、外国の学生の興味を引くものと期待しています。2008年10月には31名の学生を受入れました。受け入れ先は理学研究科、工学研究科、情報科学研究科、生命機能研究科、医学研究科、蛋白質研究所、核物理研究センターと、広範囲に及びました。ご協力いただいている先生方に心から感謝しています。

これらのプログラムは、基本的に学生交流協定のある大学との交換留学制度に基づくものであって、授業料不徴収に加えて日本学生支援機構等からの奨学金も提供されています。本部国際交流室は、とくにFrontierLab@OsakaUという枠組みの受入れに賛同し、協力してくださる先生方を増やしたいと考えています。他のタイプの短期留学プログラムも新たに加えて、短期留学生を数百人規模にしたいという夢を描いています。

短期研修プログラム

アメリカの大学の国際交流関係者と話をしていると、2～4週間程度の短い期間、他国の大学で何らかの研修を行うといったプログラムのニーズが高いことがわかります。例えばサマー・プログラムと称

して、夏休みに短期間受け入れるというものが、これに相当します。とくに学部レベルで、工学などの場合、卒業を遅らせることなく、1セメスターあるいは1年の留学を行うことは、カリキュラム編成上なかなか難しいけれども、学生には、やはり外国を経験させるべきであるというニーズがあります。本学の学生を外国へ派遣することを考えると、この事情は良く理解できます。そこで、国際交流室では、そのような学生への対応として短期研修生の受け入れの枠組み作りを始めたところです。

サポートオフィス

大阪大学は2007年10月にサポートオフィス（Office for International Students and Scholars）の試行を開始しました。その主たる機能は、これまで受け入れ教員あるいは受け入れ部局が個々に行ってきたビザ申請を一元的に処理すること、大阪大学が管理する宿舍の予約を一元的に行うことの2つですが、そのほか、ウェブ上での生活・就学情報の提供、さ

らには教職員へ各種情報の提供等も行うことが期待されています。現在は手薄な豊中キャンパスと箕面キャンパスの学生に対するサービスも、今後充実させていきたいと考えています。図1にも示したように、教育プログラムの提供そのもの以外にこのような支援体制を充実し、留学生生活の快適性を損ないかねないボトルネックを解消しなければ、世界に開かれた魅力ある大学とは言えないでしょう。サポートオフィスのほかに、アドミッションオフィス、キャリア形成支援オフィス等を設置してゆくことも、国際交流室の夢の一つです。

おわりに

本稿では国際交流、なかでも留学生の受け入れの促進に関する本部国際交流室の夢を述べさせていただきました。読者諸氏のご協力・ご支援もおおきながら、一つ一つ夢を実現してゆきたいと思っています。今後ともご指導・ご鞭撻よろしくお願いいたします。

